

中生品種 ‘かなえまる’ の埼玉県における 栽培と荒茶の特徴

茶業技術研究担当 ○上保貴則・高橋 淳・加藤俊美・上野将成・戸田秀雄

1 ねらい

‘かなえまる’は国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構（以下、農研機構）にて2022年3月15日に品種登録された新たな緑茶用品種である。茶樹は気候等の環境により生育状況などが異なるため、本県にて寒冷地での評価をした。

2 研究内容

‘かなえまる’（図1）と対象品種として‘やぶきた’‘さやまかおり’を埼玉県茶業研究所ほ場に定植して、対象品種と比較しながら栽培特性と荒茶での製茶品質を評価した（2009～2016年）。



図1 かなえまる 6年目
（2014/5/19撮影）

（1）栽培特性

‘かなえまる’は‘やぶきた’に比べて定植時の樹勢は劣って緩慢であるが、徐々に生育が旺盛になる傾向がみられた。また、樹姿はやや開張型であった。

一番茶萌芽期は‘やぶきた’と比較して+5日であるが、摘採期はほぼ同日であった（表1）。収量は‘やぶきた’より一・二番茶ともに収量が1.5倍以上と多収であった（表2）。耐寒性に関しては、‘やぶきた’などよりも寒害の発生程度が少ないため耐寒性があると評価し、埼玉県でも栽培可能であることが示唆された（表3）。病害虫については、炭疽病、輪班病、もち病に抵抗性があり、クロシロカイガラムシの発生がほとんどみられなかった。このことより、減農薬栽培に適應できる可能性がある。一方、赤焼病は‘やぶきた’と同程度で弱い結果であった。

（2）荒茶品質評価

摘採した茶葉を荒茶にして品質評価を実施した。茶成分分析計で茶成分の評価をすると、‘やぶきた’よりも全窒素および遊離アミノ酸が多く、タンニンは含有量が少ない傾向であった（表4）。また、製茶した荒茶の官能評価では外観内質ともに‘やぶきた’より優れる結果が得られた。官能評価の特徴としてうま味が強く、渋みが少ない傾向が感じられた。

3 解明点および留意点

県内茶園でも‘やぶきた’比率が未だに高い。しかし、‘やぶきた’の偏重により摘採期集中や気象災害や病害虫に対する危険分散ができないなどのリスクがある。各品種によって特徴が異なる。今後、定植する時の参考にして、多品種に

よるリスク分散を検討していただきたい。

表1 埼玉県での摘採期

品種	萌芽期		一番茶 摘採日		二番茶 摘採日		摘採日 間隔(日)
	日	差(日)	日	差(日)	日	差(日)	
かなえまる	4/18	(+5)	5/16	(±0)	7/9	(-2)	54
やぶきた	4/13	(-)	5/16	(-)	7/11	(-)	56
さやまかおり	4/10		5/15		7/7		53

カッコ内は‘やぶきた’を基準としたときの指標

表2 埼玉県での収量性

品種	一番茶			二番茶		
	芽数 (/m ²)	百芽重 (g)	収量 (kg/10a 当たり)	収量 (kg/10a 当たり)		
かなえまる	834	46.5	312.9	(159)	336	(248)
やぶきた	712	43.8	197.2	(100)	135	(100)
さやまかおり	801	46.2	301.9	(153)	234	(173)

カッコ内は‘やぶきた’を100としたときの指標

表3 埼玉県での耐寒性評価結果

品種	赤枯れ	青枯れ
かなえまる	1.9	1.6
やぶきた	2.6	2.8
さやまかおり	2.0	2.5

発生程度 5段階評価：1（無）～3（中）～5（多）

品種	一番茶(乾燥重%)					二番茶(乾燥重%)				
	全窒素	遊離 アミノ酸	繊維	タン ニン	カフェ イン	全窒素	遊離 アミノ酸	繊維	タン ニン	カフェ イン
かなえまる	5.0	2.9	21.3	14.0	3.1	3.5	0.9	28.6	17.5	2.5
やぶきた	4.5	2.1	20.6	15.9	3.2	3.2	0.3	28.0	20.2	2.4
さやまかおり	4.3	1.8	22.5	17.0	3.1	3.3	0.5	27.0	19.7	2.9

表4 埼玉県での化学成分分析結果

4 参考文献

農研機構 病虫害抵抗性で耐寒性が強い緑茶用中生品種「かなえまる」標準作業手順書（公開版）